

小田実全集（小説 第13巻）

円いひっぴい（上）



講談社  
小田実全集  
Makoto Oda



目次

作者まえがき

4

上巻 一から三十三まで

7

## 作者まえがき

「一寸の虫にも五分の魂」ということばがあります。ならば、「一寸の虫」、あとの「五分」には何がつまっているのでしょうか。投機、金儲けの思惑、打算、処世術、人生体験から来るお説教、そうしたたぐいのものもろもろだけであるのか。思想というようなもの、あるいは、観念というもの、そういったものもそこにあつて、なるほど、その「五分」のサイズにおさまっている以上、それは小さい。チンマリとして見える。しかし、それ自体が「一寸の虫にも……」と言っていることはないか。書棚にいかめしく並ぶ「世界大思想全集」のように、あるいは日本の思想愛好家、文学鑑賞家こぞつて嘆賞するドストエフスキーは「カラマーゾフの兄弟」の「大審問官」のくだりのごとく、いかめしく、おどろおどろしく論じ上げているのではない。ただ、それでも、「一寸の虫にも五分の思想、五分の観念」ということもある。チマタの人びと、作者の私自身をふくめて、みんな、けっこうものを考えているのであります。明日の競馬の思惑もやっつけていけば、世の中のありさま、人類の行く末のこともけっこう考えている。というわけで、この「円いひつぱい」、言ってみれば、「思想小説」であります。あるいは、「観念小説」。埴谷雄高さんのそれが闇の天空翔ける馬のものであるなら、これはあくまで「一寸の虫」のもので、地を這っています。





円いひつぱい  
(上)





酒を飲んでるときやった。このごろはめつきり弱うなつてしもうて、昔のように一升酒というわけにいかん。五合も飲めばてきめに眠とうなつてしもうて、あげくのはては酔いつぶれ、いや、眠りつぶれや。つまり、どこでもよろしいから、そのまま眠り込んでしまう。このあいだなんか、気がついてみたら、駅のきわの共同便所のまえに坐つていよつた。このごろの子供みたいに坐つていのか寝そべつていのか判らんようならしない坐り方しているのやあらへん。コンクリートの床の上にアグラかいて坐つて、背筋は支えもなしにまつずぐにしていた。飲んでいるときは駅前通りの「おぼはん」で飲んでいたのやし、ほんまにこの店にはおぼはんしかいよらん、おぼはんはおぼはんでもみんなしよぼくれたやつばかりやな、と戦争未亡人のおとよはん相手に悪態をついていた。おとよはんはそないに大声で悪態をつきながら、悪態のあいの手みために、ここ看板になつたらな、いつしよにスシ食べに行こか、駅前のあんな「十円ずし」みたいなケチくさいとことちがうで、上六までタクシーで行つて、パリツとしたとこで食べる。エビのな、オドリ食わしたる思うてんねん。悪態つきながら、小声でおとよはんの耳たぶのたぶたぶした大きな耳にささやき込み、おとよはんのほうもおとよはんのほうで、うち、オドリなんか食べたことあらへんねん、あれな、生きてるのをそのまま食べるやろ、こわいねん、とええかげんカマトトめいたことを言うてたのやから、あれでどうして、わたしひとり共同便所のまえに眠りこけていたということになつたのか。二日経つてまた「おぼはん」に出かけておとよはんはこわい顔で詰問すると、あるとき、安井はんのほうがりひとりで「サイナラ」

も言わんと出て行きはつたんやないの、とまるで出て行つたのがわるいみたいなことを言う。二人でいっしょに出エへんなんだんか、とカマをかけてみても、いやらしいこと言わんといてエな、うちひとりで帰つたんですがな、ととりあわなない。ほんとうのことを言うと、わたしは、今でもおとよはんがわたしひとりを共同便所のまえにおき去りにして（それも、スシを食べ、オドリをせいだいにほおばつてからや）逃げて行きよつたような気がしてならへんのやけど、わたしがそんな気持をこめておとよはんをにらみつけても、おとよはんはべつに眼をそむけもせんと平気でわたしを見返しとるのや。それで、お勘定のほうはどうやった、「サイナラ」も言わずに出て行きよつたんやろ、ちゃんと払つて行きなはつたか。わたしが自分のことをそう他人事みたいに言うと、おとよはんも、まるでわたしがそのしょうのない酔いどれのドラ息子ドラ息子の父親であるような口のきき方をした。へエ、払つて行きはりましたで、それはそれでちゃんと。

なんや気分がわるうなつてしもうて、また、景気づけに「おぼはん」で飲んだ。ケツタクソわるい、こんなところでもう飲んでやるもんかと思うたんやけど、関東煮だんまきの醤油しょうゆくさいにおいがブンと鼻に来て、おぼはん、もう一本つけてんか、というような声を聞いていると、やつぱし、こらえ性がなくなりませんやな。おまけに外は雨ですわ。十一月の夜雨よさめが降つて、ほら、歌にもありますな、夜雨よさめの京極河原町、どこで飲むとて、人の世は……まあ、それで、飲んだ。さつきみたいに他人事めいた言い方をしてもよろしい。それで、飲みはりましたで。それはそれで、ちゃんと。

コップ酒五杯でクダまき始めたこと、ようおぼえています。何でおぼえているかというと、わしもコップ酒五杯でクダまき始めるようになったか、弱うなったもんやな、やつぱし年やな、とはつきり思う

たからです。はじめはおとよはんにむかってクダまいていたんやと思う。そのうち横手に並んで坐っていた、「おぼはん」みたいな汚ない店にきちんとネクタイしめて来よつた（あんな店は、夏やつたら、ステテコ姿で行くとこや）銀行員みたいな男にむかってましたんやろ。顔はさつぱりおぼえてしません。何や知らんけど、ようおぼえてるのはしぶい柄の濃紺のネクタイや。ほんまに、どうしてやろ、それだけあざやかにおぼえている。

アケミのことを話してたんとちがうやろか。そんな気がしてしょうないんです。これもようおぼえてますのやけど、ひよいと、先日夜のことが思い出されて来ましてん。つまり、アケミの涙や。アケミが泣いていよつたことですな。このごろへんなくせがついて、わたしは酔つて来るとコップ酒をときどき眼の高さにまで上げて、コップをすかしておとよはんの顔を見たり、「おぼはん」のおぼはん、つまり、店主、店の持主やな、木下ばあさんの顔見たりして嫌がられますんやけど、そのときもそれを始めていて、安井はん、そんなケツタイなことやめてエな、きしよくがわるいよつて、ほんまにやめとくなはれ、とおとよさんに言われ、木下ばあさんに言われていた。そのうち、そのコップ・レンズで木下ばあさんの娘、御令嬢、「おぼはん」の看板娘、スター、キイチちゃんの下ぶくれにふくれた顔を見始めたんやと思います。キイチちゃんが、いやらし、この人、と大仰に声をあげ、となりの銀行員みたいな男が、あんた、そないにして見たら、何ぞええもん見えますか、とからかうように言い、わたしはわたしで、見えまつせ、ここにいるオカメかて美人に見える、竜宮城みたいなもんですわ、美人もよりどりみどり、宝の山もある、とアホウなことをもうそのときには自分にも酔いが口のあたりにまでまわつて来たことが判る口調で言うた。そのときですがな、キイチちゃんは出戻りの二人の子

持ちで、もう三十近いのやと思いますけど、それでも「おぼはん」ではいちばん若いスターや、どっかに若々しいところが残っていて、そいつがコップのガラス、ガラスのなかの液体を通して見るとゆらゆらと浮かび上つて見えた。あつ、アケミがそこにいると一瞬思つた。アケミのやつ、ここで、こんな「おぼはん」みたいにしようのない店で、大人の酔いどれ相手にアルバイトしてこいつめ、とつづけてどなり出そうとしたとたんに、涙がキラキラとキイチちゃんのいちめん小じわの入つたホッペタに流れて、もうそのときには、たしかにキイチちゃんはアケミやつた。

何でアケミが涙流してたんか。わけを言つとアホみたいなことです。わたしかてアケミからわけ聞いたとき笑つてもうた。前の日の夜、わたしが晩酌のホロ酔い気分でテレビのナイター見てたら、横でさつきから本読んでいたアケミが——まあ、そういうときは、何となく気配で判るもんですな、ひよいと気になつて横を見ると、泣いてますのやがな。涙がほんまにきれいにホッペタに光つて、女の子の涙いうもんはほんとうにいくらでも出るもんですな、眼のふちのところにくらでもたまつて、それからスウツとすじを引いて落ちて行きよる。こう言つと、えらいのんきに見ていたみたいですけど、正直言つと、何やひどうびつくりしてしもうてたんです。ドキリとしてしもうた。アケミの母親、つまり、わたしの妻のトシ子いうのがそんな女で、へいぜいはいつも陽気にケラケラ笑つてばかりいるのに、思いがけんときに涙が眼から出て来て、それが出て来たとなると、ちよつとことですわ。わたしが気配で判るようになったというんも、長年の訓練のあげくかも知れませんが、トシ子の場合、まず、鼻が赤くなる。トシ子は、顔の造作はまったくまずいですけど、肌は餅肌のきれいな肌で、それに色が白い。それだけいつそう赤鼻が目立つというわけですが、もうそないになつて来たときに

は手おくれですな。なだめても、すかしても、こつちが何や知らんけどあやまつても同じで、涙は流れる。涙が流れると、ことが起る。

そやよつて、女子の涙見るとギクリとするようにトシ子と暮しているうちにいつのまにかなつてもうたんですな。アケミのキラキラ光るホッペタを見たとき、あ、始まつたな、ととつきに思つた。何が始まつたんか、自分でもさつぱり見当もつかない。それでも、始まつたな、と、ただそれだけは思つたんです。始まつた、ということは、手おくれになつてもうた、ということでもある。どないしてん、とわたしはアケミに言うたんですが、それは、一瞬間まをおいてからやつた。

「どないしてん。」

アケミが黙っているの、わたしはくり返した。ああ、またこの子のダンマリ戦術が始まつたんかいな、と思ひました。だいぶんまえのことになりますけど、一週間近くも黙り込んでいたことがあつた。ことの始まりはつまらんことで、わたしがナイター見よう、アケミは、ナイターなんかつまらん、それよか「歌のグランプリ」を見よう、ということが始まつた。よく新聞なんか書いてあるでしょう、テレビの「チャンネル争い」というやつで、わたしはたいいていの場合ほうるそうなつてアケミとカオリ（アケミの下の妹や。アケミより五つ下で、今年、六歳になる）の言うなりになつてしまうのですが、そのときは、わたしは何や意地になつてもうてた。ひとつはわたしがひいきにしている南海が出るということもありましたけど、何ぞ昼間、仕事のこと、面白くないことがあつたんとかありますよるか、アケミが何と言おうと譲れしませんでした。最後にはアケミのホッペタにキラキラ光るもんが出て来よつたというわけやけど、その日はわたしは何が起つたつてええ、山も裂けよ、地も割れよ、という

ようなわれながら健気けなげな心境でいたんでしような、それでも譲れしません。それにアケミの言い分がシヤクにさわった。パパちゃんちゃんは南海のファンやいけど、お金払ってナイター見に行きはったことがあるか、いつでも座敷に寝そべって半分ウツラウツラしながらテレビを見てはるだけのことやないか、そんなもんファンと言えるか、今からでもタクシー拾うてナンバ球場まで行つてほんまのナイター見に行きはつたらええのや、ファン、ファンいうのやつたら、それくらいのサービスを南海にしてあげなはれ——まあ、あらましそんなことをグジャラグジャラ泣きじゃくりながら言うつつたんですけど、十一歳かそこらの女の子にこんなきついこと言われてみなはれ、ちよつと腹が立ちますで。それに、言い方がよくありませんのや。そんなイチャモンつけよるやり方はトシ子そっくりで、まあ、一口に言うたら、ねちつこいのですわ。こまかなことを次から次へもち出して、白アリがむらがつて大きな木の柱を食いつくすみたいなものです。そこで、わたしがいらいらして来て、おしまいにどなり出す。どなり出したところで、敵はだんまり戦術に移つて、半日でも一日でも、二日でも三日でも四日でも黙り込んでしもうて返事一つしよらんということになる。子供いうもんは親をそっくり真似るものですわ。ほんまにうまいこと真似しよる。結局、負けるのはこつちや。トシ子の場合で言うたら、三日目ぐらいになるとこつちも根負けして来て、いつペン、「ふぐ助」のテッチリ食たに行かへんかとわたしは何気ないふうにもち出して、それでも黙り込んでるので、もう一言、これはあとで自分ながら余計なことを言うたといつも思うのですが、このあいだのこと、すまんかったな、もう水に流そうやないか、わしもこんなことやつているのは辛いからな、と口をすべらせてしまふ。それとにかく、ようやく口をぎいてもらえらるし、テッチリもふしようぶしよう食べてもらえらるというわけす

けど、アケミもそんなことを横でじいつと見て来とるんですやろな、ダンマリ戦術のあとで負けるのはわたしや。テッチリは高いよつて食べさせませんけど、駅前通りの喫茶店で、アンミツですわ、あれを食べさせたげると言うてしまふのです。と言うたかて、トシ子にむかつてみたいにまさかこつちがあやまるいうわけではありませんで。そんなことはしてはいけませんわ。親が子にあやまるいううなことはしてはいかん。このあいだの新聞見てたら、親でもまちがいしたら率直に子供にあやまべきだと書いてありましたけど、そういうことはいかん。そんなことしたら、世の中のしめしがつかんようになります。やつぱし、親は親、子は子や。今日の若い父親や母親はそんなアホウなことをほんまにやつているのか知れませんが、それで、親を親と思わんような、先生を先生と思わんような子供がでてしまいますのや。あげくのはて、ゲバ棒ふるうて、学校の窓ガラスこわしたり、何の関係もないわたしら市民の家までつぶしにかかつて来よる。第一、先生自身がなつとらんのとちがいますか。アケミの担任の女の先生なんか、ええ年してミニ・スカートはいて、遠くから見たら、まるで、バーかキャバレエの女子おんなみたいや、ということですよ。一事が万事そうで、どだい、先生の性根がくさつとるのとちがいますやろか。ミニ・スカート先生でなかつたら、赤旗先生や。赤旗先生でなかつたら、アケミのまえの担任の辻先生みたいに胃病で、ろくすっぽ学校に出て来よらん。そら、人間誰かつて病気になるんです。そやけど、勤めをズル休みするみたいなことではいけません。わたしなんか見てみなはれ、四十度の熱出したときかて会社に出た。やつぱし、根性の問題やな。病いは気から、というんやありませんか。

その根性がゆがんでしもうとるのですな。アケミの担任のミニ・スカート先生なんか、ええ例ですわ。

そら、子供に作文書かせるのはよろします。字かて文章かてうまいにこしたことはありません。そやけど、何でもあつたこと書け、何でも思うたこと書け、というのんはまちがいとちがいますやろか。家の恥になるようなことまで書かしたりするのはキツパリやめてもらいたい。父親と母親が夫婦ゲンカをする。そしたら、昨日、パパとママがケンカをしました、と書くアホウな子があるいうんですな。昨日、ママにぶたれました、と書いた子もいます。ママはウソツキや、と書いた子もいる。アケミはまだそこまでは書きませんけど（あれでも、そんな心くばりはしてよるらしいですな）、このあいだ、月賦で電気アンマ器を買ったときなんか、買うか買わなかでまえの晩にもめたことから（うちはそんなもん要りませんで、とトシ子は言い、おまえが要らんかて、わしが要るんや。おまえの肩もまされるのはもうかなわんわ。わしの肩なんか、おまえはもんでくれたことあらへんやないか、とわたしは言うた）、月賦の額までくわしく書いて、まだそこまでやつたらしいことでもなかつたが、作文のおしまいのところに、アケミはこないに書きよつた。まだ、わたしはようおぼえていますわ、こんな高いお金出して、おまけに夫婦ゲンカしてまで電気アンマ器なんか買う必要があるか、うちやカオリちゃんなんかは子供で肩これへんのやから不公平とちがうやろか、子供の役にも立たんもんを高いお金を出して買うこともないやろ。読んでたら、何やなさけのうなつて来て涙が出て来てしもうたとトシ子は言うんですけど、今日の子供きょうこいうんはほんまにきついこと言いよるもんですな。しかし、まあ、子供は子供でつせ。問題は先生や。この作文にあのミニ・スカート先生は三重丸つけていはつて、これはこれでありがたいことでお礼を言わなければならんことですよろけど、そのあと、赤インキで、よく書けました、アケミちゃんのくやしいきもちがよく出ています、と評書いてありますのんや。「く



やしいきもちがよく出ています」とは、これは何ですもん。こんなことぬけぬけ書いて子供をおだてるもんやから、子供はますます親を馬鹿にするようになる。自分たちは労働者やとか何とか言うて赤旗振つてストライキなんかしているうちに、こんなことになつてしまっているんですな。ほんまに世は末世です。末世も末世や。

アケミの涙の話をしているんだしたな。「おぼはん」でそいつを思い出したという話や。いや、そのまえにアケミのダンマリ戦術についてケリをつけとかなあきませんな。ものごとにはちゃんとかじめをつけ、ケリをつける。起承転結というもんがかんじんやと、わたしも部下集めていつも言うてるんです。このまえアケミが一週間黙り込みよつたときは、わたしも少しわるかつたと思つてますねん。ナイターほんまに見たかつたらテレビなんか見んとタクシー拾うてナンバの球場まで行つたらええとグジャラグジャラいやみをアケミが言いすぎるもんやから、わたしはとうとう、何言うとか、このテレビはなわしが金出して買つて来たテレビやぞ、と言わんでもええことを口に出してしまつたんです。それで黙り込みですわ。まるまる一週間、口もきかずや。とうとうこつちが根負けして、このいだからアケミが欲しがつていたシャープ・ペンシルを買つて来てやりました。いつもやつたら駅前のお喫茶店のアンミツでことはすみますのやけど、今度はそうはいかん。デパート入つたついでに特売場で買つて来てやつたんですが、それでも二百二十円とられた。えらい出費ですわ。

これで、ようよう、また、アケミの涙の話ですな。さつきも言いましたやろ、テレビでナイター見ている、ひよいと横見たら泣いてました。そのときには「チャンネル争い」も何もなかつた。機嫌よくわたしはテレビ見ている、アケミは本読んでいた。それでひよいと気がつくつと、涙や。キラキラ、ホッ

ペタが光っている。どないしてん。わたしは言いました。二度、くり返して言うた。

「かわいそうやねん。」

「かわいそうて、何がかわいそうやねん。」

「象さんや。」

「……………」

「象さんがかわいそうやねん。」

何かと思うたら、アケミは象の絵本見ていたんですがな。アケミの絵本やあらしません。カオリの絵本や。

「これ、見てみいな、かわいそうやで、象さんが……」

わたしは見ました。「かわいそうな象」、なるほど、象が悲しげにこつちを見てますわ。絵描きいもんはやっぱしうまいもんで、表紙の絵の象は、べつに涙は流していよらんかったけど、たしかに悲しげに見えた。

戦時中に食糧がなくなつたし、空襲になつたら危険やいうて、動物園のライオンやトラやらを殺しましたな。象かて殺された動物の仲間やつたんやけど、その象の話ですがな。東京の動物園の話やというんです。

はじめは食い物に毒を入れて殺そうと思うたらしい。象は利口な動物ですやろ、毒入つてると思うたら食いよらん。大きな鼻で毒の入つてる食い物だけまき上げて、ポイと捨ててしまひよつた。それで、今度は注射や。何人がかりかで、大きな注射器もつて象の背中によじ登つてる絵が描いてありま

したけど、そっちの方も象先生の皮が厚すぎてうまくいかん。針が折れてしまいよつたらしい。あげくのはて、餓死させることにして、食い物をやらんようにしたのやから残酷な話ですわ。食い物ばかりやなかった、水もやらんようにしよつた。

「あんまりおなかが減つたんで、象さんは芸当しはつたんやつて。」

「芸当？」

アケミの顔は何やそんなことも知りらはへんのかと言わんばかりの小生意気な顔に急になって、もうそのときは涙はとまっていた。

「動物園で、象さんに芸当させますやろ。ようけ客に来てもらおうと思うて。」

「どんなことするねん。」

「パパってしないなア、ボール転がしたり、台の上に登ってチンチンみたいなことしたり……」

芸当のあとでは、いつも食い物を食わせてもろとつたらしい。それで、象も考えよつたというわけや。芸当してみせたら、何かもらえるやろうと思うたんやな。

「象使いがかわいそうになつて、食べ物食べさせてあげはつたんやて。」

なるほど、痩せおとろえた象が芸当をしている絵があつて、その次は象使いの男たちが泣いている  
図や。

「それで、象は毎日芸当しよつたんかいな。」

「そんなうまいことに世の中はいきまますかいな。」

ませたこと言いよりますやろ。そないにませた、わけ知つたことを言うときには、母親のトシ子そつ

くりの顔になる。

「やつぱし殺さんといかんやろ。それで……」

何かうまいことばを探そうとしたのか判りませんが、ちよつと思案ぶかげに考え込んでいるように見えましたけど、それこそ、そんなふうにもうまいことに世の中のことはいかしません。アケミのきどつたかつこうにつぼめたおちよぼ口から出て来たのはまったく平凡なことばやつた。

「やつぱし、殺しはつてん。……餓死させはつてん。」

そないに言うたとたんに、またまた、アケミの眼のふちにキラキラ光るものが出て来よつた。また泣き出しよつたらうるさいと思うたもんやから、わたしはあわてて、

「戦争中はな、死んだんは象ばつかしやないんやで。……人間のほうがな、ようけ死んだんや。象どころの話やない。人間かてな、食い物がのうなつて、ようけ死んだ。」

「そやですけどな……」

アケミはわたしをにらみつけてました。まるでその殺された象になつたような眼や。アケミはまさしくその象になつて人間をにらみつけるというわけですやろが、そんなとき、にらみつけられる相手というのんは、象使いというような、ほんまは象に親切にしていた身近の人間なんですやろな。ほかの人間は、にらみつけようと思うたかて、そばにいはいりませんからな。ほかにしようがないよつて、象は象使いをにらむ。象使いこそ人間の代表やいうて、うらめしげににらむ。つまり、象使いはわたしや。このわたしや。

「人間は死ぬときにかて口がぎけますやろ。象さんはものが言えませんのやで。何にも言わんと死ん

でしまいはったんや。」

それから泣きじやくりや。死ぬときにものが言えん、何にも言わんと死ぬということがそんなに悲しい、むごいことなのか、わたしにはよう判りませんのやけど、とにかく、アケミは、それまでは声をたてていよらんかったのですが、その自分のことばで決心がついたように派手に泣き始めよつた。

その話を「おぼはん」でコップ酒五杯目でクダをまき始めたときから、そのまき始めたクダのなかできつとブツブツ言うてたんやと思います。話がえらいこと長いものになつてしもうて、あつちこつちとまわりくどいことですけど、わたしがそないな話をしていると、いつもは無愛想でツンケンしているキイちゃんかて、えらいかわいそうな話でんな、とからだを乗り出して来よつたように思えますねん。思いますねんとはえらいたよりない話やけど、まあ、もうそのときには酔つぱらつてしもてたんやからしょうない。今から考えてみると、コップをすかしてキイちゃんのホツペタがキラキラ光つて見えたんは、ほんとうを言うて、もらい泣きしてたんやからとちがいますやろか。おとよはんが、何やたいそうな、誰ぞ死にはつたお人の話やと思うたら、象さんの話だつか、とバカにしたように言いよつたんも、キイちゃんももらい泣きしてわたしに親しげにしよつたのでヤキモチやきよつたんやと思います。おとよはんという女は、もう五十近い年で誰からもふりむいてもらえへんくせにたまにわたしみたいにチョツカイかける物好きが現われるとかえつて冷たくあしらうような女で、ほんとうに共同便所のまえにわたしを放り出して行きよつたんやと確信してゐるんですけど、キイちゃんがこつちに親しくしてそれでヤキモチやきよるんは、見ていてちよつと気味がよろしい。

「象は死ぬとき口きかれへんいうて、なかなかアケミのやつうまいこと言いよるやないか。」

わたしはおとよはんにはなくキイちゃんに言うてやった。そないに自分で言うてみると、アケミがほんとうに頭のよいかわいい子のように思われて来るよつてふしぎや。

「なあ、キイちゃん、そやろ。」

「そうでんな。」

キイちゃんはあるまり感動もしていない声で相槌うちよつた。わたしはそれが少し気にさわつたが、キイちゃんはずばやく手を動かしてぶあつい厚揚げをわたしの皿の上においてくれた。厚揚げは関東煮のなかでもわたしの好物のものなんです。キイちゃんはやつぱしわたしの好みのことをちゃんとおぼえていてくれたんです。わたしはそれだけで何やらうれしうなつて来た。とたんに、おとよはんが横からつつけんどんな口調で、水をかけるといふことばがありますな、水をかけるどころか、まるであたりいちめんほースでせいだいに水をまき散らすように、

「人間はな、そら口きけますやろ、そやけどな、うちら庶民の言うことなんか、誰も聞いてくれまへんのやで。死ぬときでも同じや。」

と一息に言いよつた。

（おまはん、何言いたいのや）とわたしは口に出して言うたかどうか、そのところはたしかやないんですけど、そないに心のなかではつきり思うたことは今でもあぎやかにおぼえています。それから、「何言いたいのやていうて、判りまへんか、あんさんには」とおとよはんが見得を切るようにしてえらい見幕で言い返して来よつたような気もするし、それともおとよはんまでがキラキラと涙をホッペタに光らせたような気もしますねん。気がついてみたら、おとよはんはくどくどと、主人の遺骨と称

するものが返つて来たときのことを話していた。

と言うたかて、何にも面白い話、変つた話やない。そこらに、どこにでもころがつているありふれた話や。途中で聞いているのが面倒くさくなつて、もうそんな陰気くさい話やめときいな、わしらはな、ユカイになるために金払うてここで酒飲んでますねんやないか、とわたしは口を出したんですが、ほんとうを言うと、さして陰気な感じになつていたわけでもない。そんな話なんか、実際、聞き飽きてますやろ。それに、もう何年昔の話ですやろか。二十年以上も昔の話やないか。十年ひと昔いいますんやから、ふた昔もまえの話やし、おとよはんみたいな境遇の人はそれこそゴマンといて、もう今では誰でもおばあさんや、ばばあや。今さらごちゃごちゃ言うたところでしょうのないことですよ。わたしはそんなことをブツブツ口のなかでしゃべつていた。その次「おばはん」に出かけたとき、キイチヤんがこないだはようししゃべつてはりましたな、PTAの会長はんの選挙にでも出はつたらどうですかいな、と下手な皮肉を言いよつた。

おとよはんの話というのは、さつきも言いましたやろ、戦死した主人の遺骨の話や。戦争がすんで一年経つて、突然、遺骨が還つて来たから取りに來いと言われて役所に行つてみたら、暗い物置のようなところに段ボールの箱といつしよにいくつか薄汚れた白い布に包んだ遺骨の箱らしいものが並べてあつた。なにしろ場所がありませんもんで係の若い男は一応は言つてみせたそうですけど、あまりすまながつているふうもない。

「線香一本たててありませんのや。……線香一本たててありませんのや。」

おとよはんはそのころもわめてたんでしようが、もう一度あらためてというようにわめきたて

よった。「おぼはん」なんかで、酒くさい息と関東煮のにおいのなかでわめきたてもしょうのないことやとわたしなんかは思いますのんやけど、そうかと言って、どこでわめきたてたらよろしいのやろ。おとよはんは先まわりしてそないにことばを返されたような気がしてわたしは黙って見てましたんですが、おとよはんはもうそのときにはわたしにむかつて話しかけていたのではないように見えた。眼がすわって来ていよった。どこか判らん宙空の一点をみつめていよって、わたしが、おとよさん、まあ、落ちつきなはれ、と言うたかてもう聞えるもんやない。

「箱、開けてみましたんやで。あの遺骨の箱な、あんまり腹が立ってしもうたもんやから、開けてみましたんや。……」

おとよはんが急に立ち上ったので、そこでようテレビ・ドラマにあるみたいに店の片隅に行つて泣きじゃくり始めるのかと思うたのですが、そういうわけにはいきません。おとよはんかてこの「おぼはん」に泣きに来てるんやない。テレビのタレントはんやつたら涙流すだけで万というお金をもらいはるやろうけど、おとよはんはそうはいかん。「おぼはん」の持主、店主、つまり、おとよはんの主人の木下のばあさんが、おとよはん、はようこれもつて行つてあげてんか、三番テーブルや、と六十五という年に似ぬかん高い声でわめきたてる。そうなると、お給金はまさにそのためにもろてるもんやから、おとよはんはふらつく足でコップ酒とスルメをかかえて三番テーブル（とたいそうにいうたかて、「おぼはん」にはテーブルは三つきりしかない。あとはわたしと銀行員みたいな男が並んで坐っている止まり木があるだけで、そないに説明したら、「おぼはん」がどんな店か判りますやろ。つまり、あんさんが会社の帰りに駅前でもいつも一杯やつてはる、そんな店や）へ行きよって、そのあいだ、お



とよはんの話ほとぎれていたわけだが、そんな気もしないのは、よほどおとよはんが大声でわめきたてて行つたからにちがいない。わたしと銀行員みたいな男は顔を見合せてニヤリとおたがいに笑つたような気がします。それがきっかけで二人は話し出したんですから、きつと、二人はニツコリ笑いあつたんでしょう。人間が三人いて、一人がへんなことを言うたり、したりすると、あとの二人はすぐ味方どおしになれるもんですわ。あの人、ちよつとおかしいでんな、わしら二人は大丈夫でんな、味方になりまひよ、というわけや。

「かしこいお子はんもつてはりますな。」

銀行員は銀行員らしくお世辞を言いよつた。

「何年生でつか。」

「五年生ですねん。生意気で困りますねん。」

わたしはまんざらでもない顔で笑うてました。子供をほめられた顔いうんは、みんな、あないな顔になるんですやろな。わたしは何かお返しせないかん気になつて、

「あんさんとこはどうですねん。」

「二人ですねん。女の子二人。」

「そんならうちと同じや。」

それから話は女の子と男の子とどつちが手がかるか、という話になつて、結論は、女の子のほうが一見手にかからぬように見えるがそんなもんはマヤカシで、ほんまは女の子ほど手にかかるもんはない。そのことは子供ばかりか大人についても真理や、ということ、キイチちゃんが、まったく不公

平な結論でんな、ひどいもんや、と子供のように口をとがらせてくちばしを入れると、そこへおとよはんが三番テーブルから戻つて来た。それから、だしぬけに、

「骨なんか入つてませんでしたんやで。」

まったく突然に言われたもんで、おとよはんが何を言うてるのか判るまでだいぶ時間がかかりましたんやけどそこへいくと、銀行員は頭のええ人ですわ、すぐ、

「何が入つてましたんや。」

と切り返しよつた。

「石ですねん。」

「石？」

「砂利みたいなしよぶない石ですがな。」

たしかにそないに言うてから、おとよはんはハッハッハッと大声をたてて笑うたように思いますねん。それとも、何やら照れくさげにニヤニヤしよつたのか、とにかく、白い歯が年がいもなく口紅派手につけたぶあつい唇のあいだからのぞいたことだけはたしかや。

「象さんのほうがまだよろしいで。」

「何でや。」

「象さんのお墓いうんがあるんですやろ、さつき、そないに言うてはりましたな。そこへは、やつぱし、ちゃんと象さんの骨埋めてはるんですやろ。砂利を埋めたるのところがいますな。」

「さあ、どやろか。砂利かも知れへんで。もつとも、あんな象みたいな大きな砂利は見つけるだけは

たいへんやな。骨のほうが安上りや。」

わたしは悪い冗談やなど自分でも思いながら言うていた。

「そやけど、とにかく絵本なんか書いてもろてるやありませんか。口きけんでも、象さんには代りにちゃんと口きいてくれはる親切な人が出て来よる。うちの人みたいなおおませんがな。うちの人は人間や。人間やよつて口をききはつた。そやけど、そんなことが何になります。骨もありませんのやで。石しかありませんのやで。それもな、庭石みたいな立派な石やありませんのやで。砂利や、ただの砂利や。」

おとよはんはいつもはこんなにしゃべりやしません。無口のほうで、こつちがムキになつて話しかけても、へエ、とか、そうでんな、とかそれぐらいの気の抜けたようなことしか言いよらんのです。が、その夜はちごうてました。おしまいには木下のばあさんもキイちゃんも、ついさつきまで佐渡おけさの合唱をやつていた二番テーブルの三人連れの客まで呆気にとられたようにおとよはんを見たぐらい、ひとりでもくしたてた。それでも最後は、やつぱり年ですな、それにもう何にも言うことがなくなつたんですやろ、息切れがして、咳がたてつづけに出て、肩で大きく呼吸いきをして、それで、まるでラジオのスイッチを切つたときのようにポツンと終つた。

「ご主人は立派に死なれた。」

おとよはんの話が終るなり銀行員がそういうかにもおごそかに言い出したのやから、わたしは息がとまるぐらいおどろいた。わたしばかりがたまげたのやない。おとよはんかて、ギクリとしよつた。たしかにギクリとおとよはんの肥つた大きなからだ動きまわつた。わたしはそのときにはまたコップ

を眼の高さにもつていて、おとよはんをコップを通して見ていたのですが、おとよはんのからだのゆらぎ、心のゆらぎはコップのガラス、あるいは、二級酒「万華」という液体を通してはつきり見えた。「私どもにはよく判っております。」

「……………」

「天皇陛下万歳、と叫んで、倒れられた。そのことばは私どもの耳にたしかに伝わっておる。」

気が狂うたんやないかとわたしはコップのレンズを通して銀行員を見ました。きちんとネクタイをして、いくぶん上気したように見えたが、洗濯のよくきいたワイシャツの白い襟といい、上品に細くしめ上げたしぶい柄の濃紺のネクタイと言い、どこにも気狂いの要素はない。あまつさえ、わたしがコップのレンズを通して彼を見ているのを知ると、自分もコップを眼の高さにまで上げて、ニッコリした。乾杯のつもりなんでしょうな。わたしもあわててコップを口につけて、コップにまだ半分ほど残っていた二級酒「万華」を喉に流し込んだ。

おとよはんは二人が乾杯しているあいだに、さわらぬ神にたたりなしというようにあたふたと逃げ去つていて、それでもうことはすんだとばかり木下のばあさんもキイチちゃんも二番テーブルの佐渡おけさの三人連れもそれぞれ自分の仕事、つまり、コップ酒と関東煮を売りつけること、あるいは、酒を飲みチクワをつまみ厚揚げを口に入れること、ついでに馬鹿声をはり上げて佐渡おけさを歌うことに専念していたから、あと、わたしと銀行員が何を話していたか、誰も知らないのにちがいない。

と言うても、わたしかてたいしておぼえているというわけではない。たしかにもう酔いが全身にまわつて来て、眠とうてしやうがない。そないになつて来ると、物音がえらい遠くから潮騒いのように

ひびいて来るようになって、ときどき、銀行員の声だけがやけにはつきりとときれとぎれに耳に入る。たしか、そのしぶい柄の濃紺のネクタイの男は、人間には死に方があるときくり返して言っているようでした。そりゃ、あたりまえやないか、人間には生き方いうもんがあれば、死に方もある。わたしがそないに言い返してやると、いや、まだまだ、あなたは判つていはらん。センエツながら、私どもはそう申し上げるほかはない。人間には、たとえば、泳ぎ方がある。ムチャクチャに水の中で手足を動かしたところでそんなものは犬カキで、前へろくに進みもしなければ、また、長つづきするものでもない。人間は泳ごうとすれば泳ぎ方を学ぶ。人間の生き方についても、教育というようなものは、つまるところ、人間の生き方について学ばせ、準備させることではないか。

「そやのに、人間は一番かんじんの死に方いうことについては放つていますな。安井さん、それは、私どもはまちがっていると見ています。」

どこから聞いてきたのか、銀行員はわたしの名前を知っていて、こつちが相手の名前知らんでいるというのはどうにも不公平のことですけど、今さら、あんさんのお名前は何ちゆうはりますねん、と訊くのもへんですやろ、それで黙っていた。わたしが黙っていると、銀行員は余計調子にのつたようにつづけよつた。

「おとよさんの御主人かて、死に方を知つてはつたらよかつたと思えますな。そしたら、あんな死に方せんとすんだ。」

あんまり確信ありげに言うもんやから、あんさんはその死に方とやらを知っているのか、と訊ねてやつた。

「さあ、どうですやろか。」

彼は笑いよった。白い歯がたしかに見えたが、べつに死神のように笑ったというわけではない。

「まあ、勉強して、練習しているところですかな。」

「練習してはるいうて、死に方のか。」

「そうですね。」

何をつづけて言えばよいのか判らんような気持で、わたしは言った。

「死に方にはようけあるんかいな。」

「そら、ありますがな。病死、事故死、自殺、他殺、戦死……病死にかつていろいろありますな。卒中でポックリいきはるのもあるし、胃ガンでこの世ならぬ苦しみをしてからやつとあの世にいきはる場合もある。事故死にも、山で凍え死にする人もいはれば、海でアップアップしはる人もいる。そうかと思うと、ガス中毒、食中毒、ビルから転落死。」

「処置なしやな。」

そうとしか言いようがありませんな、それで、わたしはもう一回、くり返して言うた。

「処置なしやな。」

「戦争へ行つてもおとよさんの御主人みたいな砂利になつてしまいはる死に方もあれば、ちゃんとジャングルの山のなかまで出かけて、骨を拾うてもろうて、国葬になる人もいはる。安井さん、山本元帥の国葬、おぼえてはりますか。山本五十六元帥。海軍のえらいさんや。」

「盛大なもんやつたんやろな。わしは日本にいやへんかったから知らんけどな。」

「どこにいはったんです？」

「シナですがな。……あつちこつち連れて行かれたけど、終戦のときは南支ですわ。」

「苦勞しはったんですな。」

銀行員はたしかに「苦勞しはったんですな」と言うのだが、わたしの耳にはそれが「よう生きて帰つて来はったんですな」と聞こえて仕方がない。それに、そんなふうに言われたところで、ええ、苦勞しましてん、とも、ええ、生きて帰つて来ましてん、とも今さらアホらしくて言えたものやない。わたしは代りに、銀行員の顔を正面からみつめながら言うてやった。

「あんさんはどちらにいはったんです？」

答えよらしませんでした。やつぱし、という感じがした。それがどういふことなのか自分にもよう判らんですけど、銀行員がそんなふうに答えよることを予感していたのとちがいますやろか、とにかく、やつぱし、や。やつぱしのやつぱし、や。わたしは別のことを言った。

「死に方練習したら、うまいこと自分の思う通り死ぬますんか。わしは胃ガンで死ぬのはいやや、卒中でポックリいくほうがええいうて、練習すると、そんなようになる……んですか。」

「そら、無理ですわ。」

銀行員はまたしごくあつさりと言うた。

「そんなことはできまへんわ。私どもも、そんなことはできるとは思っています。それは、神様が決めはることですわ。このごろやつたら、お医者はんが決めはることかも知れませんな。心臓をとりかえるなんちゆうこわいことやつてはりますやないか。ただですわね……」

銀行員はもったいぶった口調でことばを切り、(そんなんやつたら練習してもしようないやないか、何の役に立ちますねん)とわたしが言いかけると、もうそんな質問ぐらい予期していたというふうな余裕のある姿勢で、

「私どもの考えている死に方ちゆうもんはもつとちがう意味のものですな。」

「……………」

「たとえばですな、安井さん、あなたはこの世の中にワンサとウラミがありますな。死ぬときには、そのウラミを残していかなあかん。どないにうまいこと残していきはるか。」

そのことばを言うたとたんに、銀行員の頭が急にのけぞったように見えて、それこそほんとうに卒中の発作でも起しよつたんではないかと思つてあわてた。何のこともありませんがな。わたしのからだのほうに自然にガタリと段をつけたようにゆれて、もつてたコップのレンズのなかの銀行員の顔がゆれたというわけや。銀行員の顔いうても、メガネをかけてはつたかどうかそれさえはつきりせエへんのやから、実際、どんな顔つきの人やつたか、あとでいくら思い出そうとしてもさつぱり心に浮かび上つて来よらんのですわ。眼鼻だちに一向に記憶がないよつて、顔いうても、要するに顔のリンカクですな。えらい四角いリンカクでしたな。のつぺらぼうの四角や。いや、そないに言うると、まだ四角のなかに何か真白いものでもつまっているようにきこえますな。そんなんやつたらまさしくオバケやが、わたしの言いたいののはちよつとちがう。四角のリンカクだけあるのやな。リンカクの四角だけある言うてもよろしい。中身は何にもあらへん。何にもありません。つまり、吹き抜けや。風がヒュウヒュウ吹き通っているわけや。見ていると、どこからか風が吹いて来て、その四角を通つて、こつ



ちの胸にまで吹きつけて来て、オヤ、と思うと、こっちの胸にも大きな穴が開いていて、みるみるその穴は大きくなって、わたしかて、いつのまにかリンカクや、リンカクだけや。

「死ぬことは避けられませんかやろ、人間ですからな。」

銀行員は自信ありげやった。むしろ、ユカイげでさえあつた。わたしはうなづく。うなづくよりしうがない。

「そしたら、なるべく、ちゃんと、わしはウラミを残して死んで行くんや、ということをはつきりさせなければならんですやろ。」

「そら、そうですな。」

わたしは相槌をうった。気のない相槌やけど、これかつて相槌でもうつよりしようのないことですやろ。銀行員は調子にのつたようにつづけてました。

「ウラミをな、顔とかむくろとかに残して死ぬようにせんといかん。」

「つまり、こわい顔して死なないかんいうことですか。むくろのほうも、どない言うたらよろしいか、激しいかっこうして死ぬ。……」

どんなかっこうのむくろがいつたい激しいかっこうのむくろなのか、酔いがもう十分以上、十二分以上にまわつて来た頭のなかでわたしはぼんやり考えていた。股をひろげて死んだほうがいいか、それとも閉じたほうがこわいのか、ウラミが残っていることになるのか。

「そんなこと簡単なことやないですか。」

たいそうなこと言わんでもええ、とわたしは思った。

「死ぬときは苦しいし、それに、第一、人間誰しも死にとうもないから、死んで行くウラミは顔に残るわけやろ。むくろにかて残る。」

「残りませんな。」

銀行員はしずまりかえつた声を出しよつた。

「みんな、やさしい顔になりますねん。死んだとたん、どんな人かて、それこそホトケ顔になりはる。むくろかて同じですな。あれは、死ぬとき、それまで一心にこめていた力が脱けるんですな。一説によると、ボソツという音がするそうです。そのとき、ウラミもいつしよに脱け落ちるんとちがいますやろか。……戦争のとき、ようけ死顔やむくろ見はりましたやろ。どんな顔してはりました？ いつそ、やさしい顔してはつたんとちがいますか。人肉食いはつたような人でも、死んでしまえばやさしい顔や。」

わたしのからだは自然にこわばつたんは、戦争のときのことを思い出そうとして心といわずからだといわず全身がそんなふうになふうに身がまえたんやろうと思います。そやけど、そないにしてみても、さて、そのころ見た顔やむくろがどんなやつたか、かいかも見当がつかん。これがもう十年も十五年もまえなら、いくらでもはつきり顔もむくろもそのさまが眼に浮かんで来よつたにちがいないと思ひましたんやけど、そないに思つてもせんないことや。と言つたかて、かいかも忘れてしもうたというんではあれへんのです。それやつたらかえつてよろしいのんやけど（今でも、まだ夢でうなされて、トシやアケミをびつくりさせますねん）、眼閉じるとな、顔でもむくろでも、いくらでもつらなつて次々に出て来よる。まるで映画みたいですけど、ただな、顔の中身がありませんのや。むくろの中身があ

りませんのや。リンカクだけや。それだけつらなっていくらでも出て来よつて、中身のほうはずんべらぼうで、それでいて、それが死顔である、むくろであるということだけはこわいほど判っている。

銀行員はだし汁で半分茶色にそまつた煮ぬきのタマゴを指でつまんで口にほうり入れると、そのあと指先についただし汁をゆつくりなめてました。まるで猫が舌でなめまわすようなていねいなめ方で、いかにもうまそうに見えた。それから、わたしを横眼で下手からうかがいみるようにして見ながら、おもむろに、

「むつかしいですねん。」

「何がむつかしいですねん。」

わたしがそないにオーム返しに訊ねるのを待っていたんですやろな、銀行員はカオリの幼稚園の園長先生みたいにひとりでウン、ウンと二度うなずいた。

「死んでから、こわい顔していることですわ。こわいむくろとして残っていることですわ。それはなかなかむつかしいと私どもは考えるんですわ。」

戦場の死顔やむくろのことがなかなか眼に浮かび上つて来ないのがふいに判つたような気がした。あれは、やつぱし、顔にしろ、むくろにしろ、ちゃんとしたかたちで残つとるのが少<sup>すけ</sup>なかつたからとちがいますんやろか。まず、顔の左半分が弾丸に吹き飛ばされてあらへん。眼玉がゲリラにくり抜かれてる。鼻が野犬にかじりとられとる。からだじゅうウジ虫だらけや。両足があらへん。そうかと思つと、内臓がゴツソリはみ出して、ほんまに中身のリンカクだけのむくろや。

死顔とむくろのことをなおも考えてましたら、信吾はんの死顔のことが、何年ぶりですやろ、もう

三十年か四十年ぶりになりますな、思い出されて来ましてん。眼に浮かぶというんやないや。もつとからだの奥おくンところ、からだのシンみたいなところに出て来た感じやな。信吾はんいうんはわたしの母方の叔父で、競馬か相場か何やそんなもんにくつて借金しこたま背負い込んで自殺してしまひよつたアホな男ですけど、葉のみはつたんやない。ひと思いに首吊つてしまひよつた。なかなかの女たらしで、葬式するときには三、四人、情婦おんながあらわれて立ちまわりを演じよつたということやけど、わたしはまだ子供やつたからそんなことまでは知りません。ただな、遺書がありましたん。下手くそな鉛筆書きの遺書で、紙かてどうせ死ぬのやつたらケチせんともうちよつとええ紙に書きなほつたらよかつたのに思うような鼻紙みたいなペナペナの紙にゴチャゴチャ借金のこと書いてあつて、おしまいに、「世ノ中ウランデ死ヌ。ヨロシク」とあつた。子供やつたわたしは何で遺書の内容まで知つていゝのかというと、ことは簡単や、わたしがその遺書を今もつて持つてゐるからですわ。信吾はんの遺品を整理して引きとつたんがわたしの母親で、母親が死んだあと、自然にそのガラクタ一式がわたしのとこに来たというわけや。今はもう売つてませんけど（倒産してしまひよつたんですか。このごろはもつとモダンな葉が出てますよつて無理ないことですよ）、ひとところ「女の命」という名前の婦人病の坐薬がありましたな、ガラクタのなかにその坐薬のブリキ罐があつて（蓋には、うれい顔の美人の顔が大きく描いてありました）、開いてみましたら、使い古しのへや・ピンやつぶれかかつたカンザシといつしよにゴム紐でくくつた紙束がひとつ出て来た。遺書はその紙束のなかに入つてましたんやけど、ほかの紙きれいうのは、たいていは受取りの紙で、それも金額が拾五銭とか貳拾銭とかいかにもこまかい数字のもんばかりで、「世ノ中ウランデ死ヌ。ヨロシク」というような大仰なセリフに

はいかにもそぐわない。

その遺書はまだもつてますねん。「女の命」のブリキ罐のなかにヘヤピンやカンザシや領収書なんかといっしょに放り込んでありますねんけど、もう長いこと見たことありません。えらい人の由緒ある遺書やあるまいし、もつててもしようないと思いますのやけど、捨てるわけにもいかしませんやろ。もつてもべつに邪魔になるものでもないよつて放つてあるんですけど、その信吾はん、わたしは死顔まだようおぼえています。よつほど、子供心に印象が深かつたんとちがいますやろか。なにしろ首吊りはつたんですやろ。どんなにこわい顔してはるかと思うて見たら、これが案外にやさしい顔してはつた。世の中をうらんで死んだ人に見えしまへん。意外な気がしたこと、まだようおぼえています。むくろのほうはどうなつていたか判りませんが、顔のほうにはウラミは残つてませんでした。銀行員の言いよる通りや。

それから銀行員が言うてるのか、わたしがしゃべつてゐるのか、ゴチャゴチャになつて判らんようになつてしもうた。シヤム双生児というのんがありますな、二人してあないになつてしもうた感じで、もうからだもゆらゆらして来て、銀行員がゆれてゐるのか、安井はん、つまり、わたしがゆれてゐるのか、判つてゐることは二人して「おぼはん」で酒を飲んでいることで、関東煮を食べてゐることで、わたしはときどきアツハツハツと笑つていたが、何がおかしいのか、笑いながら自分でもよく判らない。それにいつでもアツハツハツがいつのまにかアツアツと間隔のつまつたものになつて、それはまるでいまわのきわの叫び声のようで気に入らない。

いろんなことを話してきました。まず、死に方を練習すれば、効果があるかどうか、というかんじ

んのことや。死に方を学び、勉強し、練習すれば、ウラミを死顔に残し、むくろに残して死ぬことができるか。わたしはそんなことはできないと言ひ、銀行員はできると言う。二人で子供みたいに、できない、できる、というやりとりを長いあいだしていたように思う。何ですん、二人とも、子供みたいに。おとよはんが笑つた。キイチヤンも笑つた。木下のばあさんまでが笑つた。どんな練習しますすねん。わたしのそのもう一つかんじんな間には、銀行員は答えやらへんかつた。その代り、毎日、むくろを見てまわつたことがあると言ひよつた。へえ、それやつたら、あんさんのお仕事は葬式屋はんだつか。ちがいますねん。……にいましてん。その……が何度訊い返してみてもよう聞きとられへん。おしまひには判つたような顔してウン、ウン、とうなずいてしもうた。空襲のときですねん。毎日毎日、焼跡歩いてむくろ見て歩きましてん。何でそんな奇特なことしはりましてん、お仕事でつか。わたしがそなひに言うつと、銀行員はクツクツと照れたようにおかしな声出して笑ひよつた。死顔見たかつたからですわ。むくろのころがりぐあい見たかつたからですわ。それで、どんなぐあいでしたんや。どんな顔してはりました、みんな。どんな顔もへチマありませんわ、みんな、まつ黒や。まつ黒焦げや。

「そんならやさしい顔かどうか判れしませんやないか。」

わたしは馬鹿にされたような氣になつて、そのところはどなつていた。サギやないか。あんさんの言うことは、みんな、サギで、あんさんはサギ師、むくろのサギ師や。それほんまやで。

「やつぱし、判りますねん。」

銀行員はしずまりかえつた声を出していました。

「やつぱし、やさしい顔して死んでほりますねん。まつ黒焦げになつても、それは判りますねん。むくろかて大人しいかつこうしてはつた。ウラミはもう何にも残つとりませんのやな。みんな消えてしもうた。みんな燃えてしもうたんですな。」

「つまり、あんさんは、そやから死に方を練習せんといかん言いほりますねんな。」

そないに言い出したとたんに、何や知らんけど、ふいにえらいこと腹が立つて来た。銀行員があんまり落ちつきはらつていたのがカンにさわりよつたのかも知れまへんな、大きなお世話や、と言うてやりましてん。あんさんは人間はみんなウラミもつていと勝手に決めてかかつてはるけど、人間はみんな楽しんで生きて、それから死ぬんや。ほかの国の人間はいざ知らず、日本人はな、ウラミ、ツラミを顔に残して死ぬような人は誰もおらんねん。あんさんはな、日本人ちゆうもんを誤解してはるんや。わしを見たかてよろしいわ。わしはなア、さつきも言いましたけどな、そら戦争へ行きましたで。えらい苦労しましたわ。そやけどでつせ、わしはウラミなんか、残して死ぬつもりあれへんわ。わしはな、ここだけの話やけど、要領がよろしまんねん。軍隊では、あんさん、まず、要領や。頭のわるい人はあきまへんわ。学校出てたかて、そんなんはあきまへん。軍隊いうところはな、こない言うたら何ですけどな、ほんまに人間が頭がええかわるいかがはつきりするところや。学校出てたつて何やつて、そんなことは問題にならしません。そら、なるほど、わしは学校なんか出てまへん。そやけどな、わしはな、下士官まで行きましたで。伍長まで行つた。わしと同年兵の学校出の黒木なんかまだ一等兵や。……わしはなア、死ぬときは楽しんで死にますわ。ウラミ残して死にませんわ。誰もうらまんと、誰にもうらまれんと……

「むつかしいこと言いはりますな。」

銀行員がまた余計なことを言い出しよつた。わたしは腹を立てていた。あんさんは、今さつき死人はみんな誰もうらまんと死んではる言いなはつたやないか。あんさんの言うこと、やつぱし、みんな、サギやな。あんさんはサギ師やな。

「私どもの考えでは、誰にもうらまれんと死ぬのはむつかしいということですか。……」

銀行員はまた、いや、さつきよりも一層落ちつきはらつていよつた。

「ま、私どもはそう見とるのですな。」

アツハツハツとわたしは笑うてやつた。途中で息がつかまつて、アツアツアツとなつてしもうたが気にしない。笑い終つてから、さつき話した「かわいそうな象」の話をまだおぼえてはるか、と言うてやつた。さつきはわざと言わなただけど、あの話にはもう少し奥行きがあつて、あれはな、実は三頭の象の話やねん。あんさん、よう聞いてなはれや、三頭の象の話。一頭の「かわいそうな象」の話やない。

三頭の象はいつときに殺されたんやない、とわたしがおもうとしたら、そうですがな、いつもワルサばかりして象使用に憎まれてた一頭が先に殺されよつたんですがな、と銀行員はニコニコしながら先まわりして言つた。あとの二頭はええ子やつた。芸当もよくやつたし、大人しくもあつた。それでまず手はじめに一頭、うるさい、いやなやつを殺して……わたしはしゃべつていたような気がするし、銀行員が話していたような気がしますな。もうそのころになると、わたしと銀行員はどちらがどちらかよく判らんようになっていて、団子をこねまわしたみたいになつていて、わたしがコップを口にやると彼もやる、わたしがチクワをつまむと彼もつまむ、私が、キイチちゃん、もう一杯、彼が、キイチ



ん、もう一杯、私が、まず手はじめに一頭、うるさい、いやなやつを殺して、彼が、まず手はじめに一頭、うるさい、いやなやつを殺して……

「うるさいやつにならんかつたらよろしいねん。いやなやつにならんことや。」

わたしはまたどなつていた。銀行員はニコニコしてました。何で彼がそんなにニコニコしているのか、あいかわらず眼の高さに上げたコップのレンズごしにわたしは彼を見ていてそんなふうと考えていたんですが、考えはすぐとぎれてまとまらない。あんさん、聞いてなはるか。いやなやつにならんことや。みんなに好かれて、芸当もちゃんとして生きることや。そしたらな……

わたしは絶句した。銀行員を見ると、銀行員はまたニコニコして、一言、サラリと言うてのけた。「殺されんですむ。」

「その通り。おみごと、おみごと。」

わたしはまたアッハッハッと笑った。今度は手まで打った。キイチちゃんがわたしをにらみつけたが気にしない。途中でまたアッハッハッはアッアッアッになったが、かまいはしない。苦しい息の下からわたしは言うてやった。

「これがな、あんさん、人生のコツや。」

銀行員はまだニコニコしていて、わたしの顔をわたしがするみたいにコップを眼の高さにまで上げて、コップのレンズを通して見て、しばらくそうしてから、またサラリと口をきいた。

「そうですけどな、安井はん、あとの二頭かて、結局、殺されましたな。」

わたしは訊いてやった。

つづきは製品版でお読みください。